

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	柳宗悦の「無地の美学」
Title(English)	
著者(和文)	佐々風太
Author(English)	Futa Sasa
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12792号, 授与年月日:2024年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:中島 岳志,伊藤 亜紗,北村 匡平,河村 彩,畑中 健二
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12792号, Conferred date:2024/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	論文要旨
Type(English)	Summary

論文要旨

THESIS SUMMARY

系・コース： Department of, Graduate major in	社会・人間科学 社会・人間科学	系 コース	申請学位（専攻分野）： Academic Degree Requested	博士 Doctor of	(学術)
学生氏名： Student's Name	佐々風太		審査員主査： Chief Examiner	中島岳志	

要旨（和文 2000 字程度）

Thesis Summary (approx.2000 Japanese Characters)

柳宗悦の思想において、「無地」という造形はいかなるものであり、どのような意味をもっていたのか、主に文献調査に基づき本稿では整理・考察している。この点は先行研究では明確に主題とされてこなかった。本稿では、柳の言説を時代ごとにたどり、柳が無地と位置付けた造形を整理し、それぞれの時期の彼の無地論の特徴を整理している。その上で、それぞれの時期、そして彼の生涯において、無地がどのような意味をもっていたのか確認している。 第一章では、本研究の主題を明らかにし、先行研究の状況について明らかにする。それにより、柳宗悦の無地論については、一部の研究で言及はあるものの明確に主題化されてきておらず、深く論究されてこなかったことが確認される。 第二章では、柳宗悦の『白樺』時代（一九一〇年—一九二三年）の無地をめぐる思索について考察する。前提として、当時の柳の神秘思想への傾倒や工芸への開眼について整理し、それを踏まえて、この時期に記されたと思われる彼の無地論を検討し、彼が無地を「単調」とは異なる「無限」を含んだ造形と理解していたこと、そこに座右の中国古陶磁という具体的な器物の鑑賞が深く影響していたことを指摘する。また、彼がそこに「無」という宗教的主题を投影していたことも、あわせて指摘する。さらに、西田幾多郎の思想がそこに影響していた面について一考していく。以上により、無地の造形という物質的な領域を通して宗教的な絶対性を感得していく、という柳の思索の独自性が浮かび上がる。 第三章では、柳宗悦が民藝運動を牽引していった一九二五年—一九四〇年代を中心に、彼の無地をめぐる思索を検討する。前提として、この時期の柳の歩みを整理し、それを踏まえて、一九二〇年代・一九三〇年代・一九四〇年代それぞれに、彼が具体的にどのような造形を無地と呼び、それをどのような領域や産地の器物に見出し、それらについてどのような語りを見せていたか、確認する。これにより、柳が新旧の多様な領域・産地の器物の無地について継続的に観察や思索を行っていたこと、第二章で見た彼の最初期の無地論がより広い範囲の造形に応用されていったことが浮かび上がってくる。また、柳が多くの変種のある器物にも触れていたことに留意し、それらの中で、無地が「標準」「無地の心」といった鍵語と共に審美の基準の役割を果たしていたことも明らかになる。さらに、優れた文様が生まれづらいつまの近代の中で、無地の造形が高次の「無難」の様相を示すもの、多くの作り手が立ち返るべき造形として、彼に位置付けられていたことも確認される。 第四章では、柳宗悦が民藝運動に関する活動に区切りをつけ、「仏教美学」の形成に注力した、一九四八年—一九六一年（没年）までの彼の無地論について考察していく。前提として、美醜の二元性の超越を説く「仏教美学」について確認し、それを踏まえて、当時の彼の無地論は、それ以前の無地論の延長線上にありながらも、作品の「素裸」の質感の美という点に力点が置かれるようになっている面があり、特に「無地の美」としての陶磁器の窯変への注視が著しいものとなっていることを指摘する。そして、「仏教美学」の形成は、「美醜をこ
--

えた」造形としての窯変―無地の器物を欠かすことのできない参照項としながら進められていたこと、無地論は「仏教美学」を具体的に説明するある種の説法となっていたことを、あわせて指摘する。また、「仏教美学」と連関するものとして柳が深めた「妙好」論と窯変―無地の造形の関係性を一考すると共に、窯変―無地と呼応する主題として柳が位置付けていた「疵」の問題についても、補足的に論じる。

第五章では、無地をめぐる柳の語りの中に確認される、「見る」―「見られる」の構造について整理し考察していく。まず前提として、柳が無地を偶発的な造形と見なし、「見られる」ことによって発生する存在であると考えていたことを確認する。「見る」側の「受取り方」「誤訳」によって、造形や言動が作者・行為者の想定していなかった美―利他となると柳は見、同時に、それを計画的に再現しようという作為を批判する。この章ではこうした点をめぐって、濱田庄司から柳が受けた示唆について一考し、特に濱田の原料の扱い方、とりわけ塩釉の技法から、計画性と偶発性を止揚させることで新たな無地―美―利他が生まれ得るという希望を、柳が得ていたことに触れる。また、こうした柳の見方が、作者・行為者の主体性への理解の欠如と捉えられ得るという点についてあわせて触れ、この点と偶発の美―利他という問題は同時に存在しており、この併存のジレンマを含むものとして柳の無地論を位置付ける。

第六章では以上の点を整理し、柳が見た無地は、多様な領域の器物の中に見出される造形であり、彼がそこに宗教的な主題を一貫して重ねて論じていたこと、彼が生涯無地に関心を持ち、その鑑賞を欠かすことのできない思想の基礎としていたことを明示する。

備考：論文要旨は、和文 2000 字と英文 300 語を 1 部ずつ提出するか、もしくは英文 800 語を 1 部提出してください。

Note：Thesis Summary should be submitted in either a copy of 2000 Japanese Characters and 300 Words (English) or 1copy of 800 Words (English).

注意：論文要旨は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。

Attention: Thesis Summary will be published on Tokyo Tech Research Repository Website (T2R2).

論文要旨

THESIS SUMMARY

系・コース： Department of, Graduate major in	社会・人間科学 社会・人間科学	系 コース	申請学位（専攻分野）： Academic Degree Requested	博士 Doctor of	(学術)
学生氏名： Student's Name	佐々風太		審査員主査： Chief Examiner	中島岳志	

要旨（英文 300 語程度）

Thesis Summary (approx.300 English Words)

This paper aims to clarify Yanagi Muneyoshi (1889-1961)'s thought about the 'plainness' of crafts. Yanagi is well renowned as the leader of the 'Mingei (folk craft) movement' and there are many previous studies about him, but his thought about plainness has not been researched enough.

In Chapter 1, I reference the previous studies and confirm the subject of this research.

In Chapter 2 - Chapter 4, I consider Yanagi's text about plainness, focusing on the period from 1910 to 1923, the period from 1925 to the 1940s, and the period from 1948 to 1961 (the year of his death). From 1910 to 1923, Yanagi was a member of the 'Shirakaba' (a literary coterie magazine), and at that time he made an early theory about plainness, in which he interpreted its figure as 'infinity' or 'nothingness' (Chapter 2). From 1925 to the 1940s, Yanagi created the word 'Mingei' and led the 'Mingei movement', and he found the beauty of plainness in various folk crafts and understood it as a reflection of makers' attitude toward natural material (Chapter 3). From 1948 to 1961, Yanagi formed 'Buddhism-aesthetic' (aesthetic based on Pure Land Buddhism), and he focused plainness of old ceramic wares as simple examples of the power beyond artificiality (Chapter 4).

In Chapter 5, I consider the relation between Yanagi's thought about plainness in which its beauty is always placed as 'being seen' existence and the contexts of craft makers. In addition, I consider the relation between Yanagi's theory and the technique of Hamada Shoji (1894-1978), especially his salt glaze technique which gave Yanagi the hope that a new form of the beauty of plainness could be created.

From these considerations, in Chapter 6, I conclude that Yanagi found the beauty of plainness in a variety of works, and he consistently projected religious themes ('nothingness' or 'the power beyond artificiality') onto them.

備考：論文要旨は、和文 2000 字と英文 300 語を 1 部ずつ提出するか、もしくは英文 800 語を 1 部提出してください。

Note: Thesis Summary should be submitted in either a copy of 2000 Japanese Characters and 300 Words (English) or 1 copy of 800 Words (English).

注意：論文要旨は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。

Attention: Thesis Summary will be published on Tokyo Tech Research Repository Website (T2R2).